

京都モノ銘品がたり— ⑪

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかけた物語をご紹介します。

京 繡

油絵のように立体的だったり、写真のように精緻だったり。艶やかな糸を一針、一針でいねいに刺し、着物や帯を彩っていく日本刺繡は、京都らしい雅である。

日本に刺繡が伝わったのは六世紀。中国から仏教と共に繡仏^{しゅうぶつ}が伝わったのが初めとされている。繡仏とは、刺繡で仏像をあらわしたもので、奈良時代には縫部司^{ぬいべのつかさ}と呼ばれる官給の衣服の縫製をつかさどった官司のもとで多くの繡仏が作られていた。

都が京都へ遷され平安の世になると、繡仏は徐々に衰退していき、貴族の衣装や女性の十二単など官廷装束を彩る華やかな色彩と文様の新たな「繡」に注力されていく。日本刺繡の起源が京繡^{きょうい}とされる所以である。

浄土教が広まった鎌倉時代は、再び繡仏が盛んになる一方で武具や太刀の平緒や刀の柄袋にも刺繡が施されるようになる。能狂言の衣装などに豪華な繡が施された室町時代、繡と絞り染め、繡と摺箔^{すりはく}など

他の技法との併用が盛んになった安土桃山時代、金糸・銀糸を用いた豪華絢爛な美服が流行した江戸時代を経て、奢侈禁止令などで憂き目に遭いながらも京繡は綿々と現代まで続いてきた。

京繡は、着物や帯、半襟など和装が主だが、このほかにも能衣装、緞帳、袱紗、人形衣装などに用いられる。そして、祇園祭の山鉦の軒吊りや胴懸け、水引、見送りなどを飾っているのも京繡だ。貴重な下絵に基づき、復元新調するために「繡師」が活躍している。

糸の燃り方と繡方で変わる光沢と色彩

着物の場合、刺繡は最終に近い工程で行われる。一般的には、悉皆屋^{しっかいや}といわれるプロデューサーが繡師のところに図案と染め上がった反物を持参し、大まかな雰囲気や色味、対象など要望を伝え刺繡を依頼する。その図案をシルクスクリーンで着物に写し、約4000色の絹の刺繡糸から配色を決めるのだが、

30色ほどの刺繡糸で表現した「王朝のあそび」(左)と「古代裂」(右)など京繡は着物や半襟を華やかに彩る



両手で針と糸を操りながらミリ単位で刺していく細やかな作業の連続。



思った位置に返し針が出せるのも職人の成せる技。針の出し入れがしやすいように、生地は硬いくらいに張ってある。



自らの手で調整しながら、かせの状態から糸まきをしていく。



「赤」系の色だけでも微妙な違いで展開されている日本の伝統色の刺繍糸。組み合わせることで、さらに色の幅は広がる。



中村彩園さんの作品。刺し繍と呼ばれる立体的に見える繍方で、梅の花びらやうぐいすの毛並が見事に描かれている。

このときに撚り方や太さも考えなければならない。日本刺繍用の絹糸は、織物用とは違いまったく撚りがかかっていない平糸。12 菅で 1 本の糸になっており、2 本合わせにしたり、半分に細くしたりと同じ色系でも太さの違いや撚り方の強弱で仕上がりの色や光沢に差が出て深みが増す。これは断面が丸みのある三角形をしているため、この光沢をさらに美しく見せるために繍方も工夫する。

技と経験に基づく細やかな作業

刺繍は、短い針を上下に運ぶのみのシンプルな動き。糸の太さによって 13 種類の針を使い分け、図案に合う繍方を考える。返し針の重ね工合によって線の太細を表現する「まつい繍」、柄の中心で対称になるように鋭角に繍進める「割り繍」など、100 種類におよぶ繍方からふさわしいものを選んでいく。

「針も糸も細く、生地から針を出す位置が 1 ミリ

違っても作品の表情が変わってくる」と語るのは、京繍の伝統工芸士、中村刺繍の中村彩園さん。37 名いる伝統工芸士の中で数少ない女性の繍師だ。木枠で固定した生地に対して垂直に針を入れ、引き返す針も迷うことなくぴたりと正確な位置に出す。しかし、プロであってもイメージ通りの色彩や形に仕上げるのは難しいという。その要因の 1 つは刺繍糸。手染めゆえ毎回同じ色味に仕上がるとは限らないからだ。しかし、そこにこそ経験に裏打ちされた創造力と個性が光るのである。

京繍は、刺繍糸と繍方の組みあわせの妙で生み出されている雅なもの。着物や帯の中で存在感を出しながら決して目立ちすぎない、控えめで上品な京女を彷彿とさせる。

(取材協力：中村刺繍

<http://www.nakamurashisyu.com/>)